新・地域考　学校現場で苦しむLGBT　オピニオン

いじめや暴力経験7割 3割は「自殺考えた」

性的少数者に教員理解進まず

1面から続く

自分の性別が違うと最初に感じたのは小学校低学年のころと記憶している。岡山市の大学生、高田春樹さん(仮名)＝20代、戸籍上は女性＝は成長するにつれ、その違和感がだんだん強まったという。

中学1年の時、強いショックを受ける出来事があった。「スカートをはくのがつらい」。勇気を出してスクールカウンセラーに相談した。「秘密は守る」と約束してくれたが後日、担任に呼ばれ、「そういうのは無理だから」と告げられた。

以来、大人に頼ることを諦めた。自分が嫌になり、間もなくカッターナイフで自傷行為を繰り返すようになった。

性同一性障害や同性愛など性的少数者を意味する「LGBT」。民間の支援団体「東京」によると、その大半は小学校高学年や中学校時代に自らが性的少数者だと自覚。7割は学校などでいじめや暴力を受けた経験を持ち、3割が自殺を考えたことがあったという。

深刻さの一方で、学校現場の理解は進まず、LGBTに関する教育は整っていない。

関西の研究者グループが2011～13年に実施した教員約6千人への意識調査では、学校で教える必要が「ある」との回答は性同一性障害で73%、同性愛で63%に上る半面、授業で実際に取り上げたのは14%にとどまった。機会がなかった(42%)「LGBTをよく知らない(26%)」「教えにくい(同)」などが主な理由だった。

岡山県教委によると、LGBTに関しては、小中学校の人権担当教諭を対象とした研修会で数年に1回、性同一性障害をテーマとして扱う程度。一部の小中学校で人権学習として取り組むこともあるが、「定期的にカリキュラムに組み込む学校はまずない。特に同性愛を含むLGBTは教えにくく、扱いづらいのが実情」(人権教育課)という。

「多くの学校はLGBTの問題を緩速いと考え、当事者意識を持ちにくい」。岡山県南のある中学校長は言う。

この学校では数年前、成績の優秀な女子生徒が卒業直前に不登校になった。理由はスカートをはくのが我慢できないー。校長は担任と相談し、制服にこだわらない進学先を一緒に探した。

校長には20年前、苦い思い出があった。

他の女子との着替えや体育の授業を嫌い、孤立しがちだった女子生徒のことを、職員室では他の教員と「変な子だ」と軽口をたたいていた。ところが、成人後に再会した女子生徒は性同一性障害と診断され、男性として生きていた。

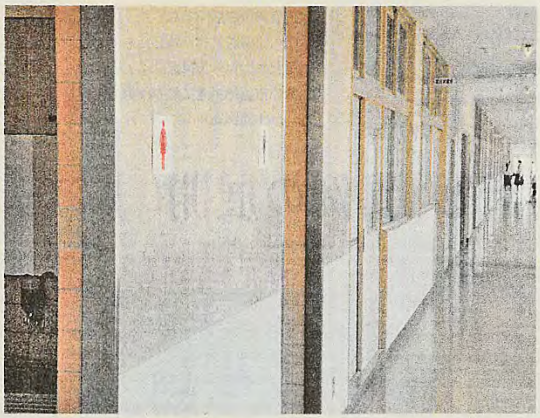
「苦しい思いに当時、なぜ気付いてやれなかったのか」と悔やんだという。

同性愛者という県南の中学生女子は昨年、事実を打ち明けた教員の態度に傷ついた。「『思春期の気の迷い』と言わんばかりだった」という。同性の交際相手と手をつないで歩く姿を同級生に見られ、いじめを受けたこともある。「でも何を言っても無駄と、教員には二度と相談することはなかった」。

小学校低学年から性別への違和感を抱え、胸を締め付けられるような思いで学校に通い続けたという高田さん。一方で教員の言葉に救われた経験もある。

自傷行為を重ねていた中学3年の時、胃がいようで保健室に出入りするようになった。そのたびに養護教諭は優しく声を掛けてくれた。「この人なら」と性別への違和感を打ち明けると「大丈夫。そういう人はたくさんいる」と励ましてくれた。自傷行為は自然と収まったという。

岡山市のLGBT自助グループ「プラウド岡山」は「LGBTの子どもは、学校で周りが気付かないうちに偏見や差別に苦しんでいる。学校での積極的な取り組みや教員のちょっとした気配りが、大きな救いとなることを知ってほしい」と指摘している。



▲岡山県内の公立中学校の生徒用トイレ。LGBTの中には男女別のトイレに入ることに抵抗ある子どももいる（写真と本文は関係ありません）

きめ細かな対応、各校に求める

文科省通知

文部科学省が、性的少数者の児童生徒に関して4月に出した通知は、各学校のきめ細かな対応とともに、教職員一人一人の適切な理解を求めている。性同一性障害の児童生徒に関する同様の通知は従来もあったが、今回は同性愛などを含めたLGBT全体に初めて対象を拡大した。

通知に先立ち文科省は昨年6月、初の実態調査を実施。性別に違和感を持ち、学校に相談している児童生徒は全国に少なくとも600人在籍すると判明。その6割近くが同級生らに隠しているか、ごく一部にしか明かしておらず、カミングアウト（告白）しているのは2割弱だった。学校側が特別な配慮を行ったケースは6割にとどまった。

いじめ被害の有無などは設問になかったが、不登校や自傷行為に触れた自由記述が複数見られた。

通知は、性的少数者への心ない言動を慎むよう教員に要請。画一的ではなく、児童生徒一人一人の状況に応じた取り組みを進めるよう学校内外にサポートチームを設置したり、複数の教員や医療機関などと連携したりするよう求めた。

性同一性障害の子どもについては、各学校で実際に行われている支援事例を紹介。「自認する性別の制服を認める」「職員トイレ・多目的トイレの利用を認める」「上半身が隠れる水着の着用を認める」などと具体的に示した。

岡山県教委人権教育課は「教員研修などを通じ、通知を県内の小中高校に徹底し、悩んでいる全ての児童生徒が安心して自分らしく学べるよう環境を整えたい」としている。

性同一性障害の児童生徒に対する学校の配慮事例

服装	自認する性別の制服や体操着の着用を認める
髪形	（戸籍上男性の児童生徒に）標準より長い髪形を認める
更衣室	保健室や多目的トイレなどの利用を認める
トイレ	職員トイレや多目的トイレの利用を認める
呼称の工夫	通知表などを、児童生徒が希望する呼称で記す
授業	体育・保健体育で別メニューを設定する
水泳	（戸籍上男性の児童生徒に）上半身が隠れる水着の着用を認める
運動部の活動	自認する性別に関わる活動への参加を認める
修学旅行など	1人部屋の使用を認める。入浴時間をずらす

※文部科学省調べ

それぞれの心情に寄り添って

岡山大大学院
中塚 幹也教授

学校生活の中で生きづらさを抱えるLGBTの子どもたちを、教員ら大人はどう支えればいいのか。GID（性同一性障害）学会理事長の中塚幹也岡山大大学院教授(54)に聞いた。

―LGBTの子どもたちの現状は。

性的少数者に向けられる社会の偏見や嫌悪感に幼少期から接することで、「自分は変、悪い」という意識が生まれ、自己肯定感が低くなるケースもある。対人関係などのスキル習得にも影響しやすく、さらに勉強や運動にも影響すると自己評価を下げる悪循環に陥りがちだ。実際、いじめ被害や自傷行為、自殺のリスクが格段に高いとのデータもある。

―文部科学省は4月、学校現場にLGBTの児童生徒への配慮を促す通知を初めて出した。

―文科省は2010年、性同一性障害の子どもを対象に配慮するよう通知している。しかし、調査では教員の半数以上が通知の存在を知らず、不十分だった。今回は、LGBT全体への配慮、教員の言動への注意、具体的な対応例などを盛り込み、充実した内容となっているため、ぜひ徹底してほしい。ただ、画一的なマニュアル化は危険であり、それぞれの心情に寄り添った対応が必要だ。

―性同一性障害に関する初の実態調査が行われ、全国の小中高校で少なくとも606人が確認された。

あくまで氷山の一角だ。10カ月間に学校へ相談があったケースのみを拾っており、しかも当事者や保護者が拒否した場合は含まれていない。不登校やいじめ被害などの深刻な事例、未対応の事例は報告されなかった可能性もある。実際にはもっと多いと推測されており、身近にいるとの意識を持つことが大切だ。

―学校でのLGBT教育はどうあるべきか。

保健体育や性教育、人権教育などの枠組みを利用し、早い段階から積極的に取り組んでほしい。当事者の子どもたちにとっては自身の状況を理解し、相談する契機となる。他の子どもにも多様な性の在り方を理解する人権感覚を養う機会となる。

―LGBTの子どもたちから相談を受けた教員はどう対応すればいいのか。

相談してくれたということは信頼されている証しであり、まずは感謝するべきだ。一方で期待に応える責任もある。対応はケース・バイ・ケースが基本となり、知識と経験が不可欠だ。日ごろから研修や関連資料で知識を身に付け、医療機関とも連携し、その専門性を活用してほしい。

なかつか・みきや　岡山大大学院修了。1998年より同大ジェンダークリニックで診療。2007年から同大大学院教授。同大生殖補助医療技術教育研究センター教授も兼務する。教師らを対象とした性同一性障害に関する講演を年間20回程度行う。倉敷市出身。